

---

# 魔女の小さな森

葉琉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法の小さな森

### 【Nコード】

N0728Z

### 【作者名】

葉琉

### 【あらすじ】

森の中にある店には、変わり者の魔法が住んでいる。店で扱っているのも、役に立つ薬から得体のしれない品物まで様々。そこに住み込むことになった普通の女性と店主である魔法、そして、不思議な客たちとの、どこか日常から外れた物語。

## 1・あめ

その店は、村に近い森の中にあった。

比較的穏やかな獣や、大人しい魔獣しかいないため、子供たちの遊び場にもなっているその森に、いつ頃その店が出来たのかは、わからない。

村で一番の年寄りも、自分の祖母が生まれた時にはもうあったと言っ。

今の店主が村にやってきたのは20年も前のことだが、それまでは、違う女性が店にいた。

その女性以前は、若い夫婦だったらしいが、彼女らの代替わりがどうやって行われ、どういう理由があつて次の店主に選ばれるのかも、誰も知らない。

ただ、扱うものはいつも同じで、役に立つ薬草から、得体の知れない薬や物まで様々で、必ず店主は魔女なのである。それだけは、ずっと変わらない。

そして、現在そこに住んでいるのは、店主である魔女と、近くの村出身の女性二人きりだった。

しばらく雨が続けている。

どこか湿り気をおびた店内を眺めながら、店番を兼ねてこの家に住んでいる多紀は、溜息をついた。

時期とはいえ、こう雨が続くと、建てられた年代もわからないくらい古い店舗兼住居である建物は、あちこちで困った事態になる。

例えば、湿気で扉がうまく開かなかったり、普段使わない部屋で雨漏りがしたり、部屋の椅子や敷物がかび臭くなったり、などである。

掃除はこまめに行っているし、空気もなるべく入れ換えるようにし

ているが、どうにもならないこともあって、店と住居部分の管理を任されている身には憂鬱な時期なのだ。

客足も鈍るが、それでも、雨の日が続くと、やってくる客もいる。その客の目当ては、森の中で採れる石だ。

晴れた日には他の石と同じにしか見えないが、雨が降り、水を蓄えると独特の光を放つ。魔女だけでなく魔法使いと呼ばれる人々から、魔力の宿るそれは重宝されており、好んで装飾品に使ったり、砕いて一般の人向けのお守りを作ることもあった。

この森には、その良質の石が多数存在している。

森の所有権を主張する店主は、それを結構な高値で売りさばっていた。そのため、魔女は石探しには比較的熱心なのだ。

多紀は、窓の外を眺める。

前回来たの日から数えても、そろそろ『常連』が訪れてもいい時期だった。

そう思っ、暇潰しに広げていた雑誌を閉じる。

時刻はちょうど、お昼の少し前。

朝の弱い魔女も起きてくるだろう。そう考えて立ち上がりかけた時だった。

重い扉がゆっくりと開き、風と雨が室内に吹き込んでくる。

客が来たことが分かるように取り付けられた小さな鈴の音も、今日は風に吹き消され、聞こえない。

それでも、扉が開いて入ってくるのは『客』とわかっているので、愛想笑いを浮かべつつ、多紀は顔を上げる。

「いらつしやいませ」

いつものように声をかけるが、開いたままの扉の向こうから、雨の雫だけでなく木の枝や葉が舞い込んできて、思わず動きを止めてしまう。

それに気が付いたのか、外にいた男が慌てて中に飛び込み、扉を閉めた。

「悪い、汚しちまったか」

申し訳なさそうに謝った男は、扉の前から動かずに立ち尽くしている。

着ている外套はびしょ濡れで、そこから垂れた水滴が床を塗らすことを気にしているのかもしれない。

「お気になさらず。魔女の部屋の惨状に比べたら、そんな水滴や風で飛んできた木の葉なんて、かわいいものです」

「雫さん、相変わらずだなあ」

店主の名前を口にすると、男は笑う。

この店舗兼住宅の主は、散らかすことは得意だが、片付けるのは苦手という困った性分なのである。多紀が何度部屋を片付けても、嫌がられるくらい文句を言っても、面倒の一言で終わらせてしまう。住居の様子は客には教えていないが、雫がこちらへ来るときは、だらりと服を着崩していたり、髪が跳ねていたり、どこに物を置いたがわからなくなつたと言っては、多紀に怒られているので、客も大体の様子を察しているのだろう。

「いつもの、あれでいいんですよね？」

男の脱いだ外套を受け取りながら多紀が問いかけると、ああ、と彼は言った。

「どうしても、ここの森のじゃないとダメっていうからさ」

困ったような顔をして、どこか男は嬉しそうだ。

「用意してあります」

「さすがだね」

面倒、眠いが口癖の魔女だが、金払いのいい客に対しては重い腰も簡単に上げる。

そろそろこの男が来るころだと、ふつぶつと文句を言いつつも、魔女は昨日森の中へ出かけていったのだ。

「今回の石は、上物だと言っていましたよ」

外套をかけた後、男に椅子を勧めると、多紀は用意していた袋を手渡す。

確認のために、男は中身を見るが、小さく肩を竦めて首を振った。

「やっぱり、どこがどうすごいのか、わからない」

男の言いように、多紀も笑う。

そうなのだ。この石は、魔力を持たない者が見ても、小汚いただの石だ。当然、多紀にもそこらにごろごろしている石と同じにしか見えない。

「私ですよ。だから、うっかり捨ててしまわないように気をつけているんです」

拾ってきたものを所定の位置に雫が置いてくれないので、大事なものが行方不明になるたびに、家の中を歩いて探し回るのは多紀だ。それほど広くはないし、雫の大体の癖を把握してしまった今では、どこらへんに何を置き忘れるかなどわかっているが、ここへ来た当初は失敗もよくしたものだ。

「でも、雫さんが見つけたものは、いつも品質が良いって、誉める。この森の状態もいいだろうなって。俺たちがいる場所は、あんまり良い感じの場所じゃないしな」

男の顔は、話しながら、段々と緩んでくる。

頭の中には、この石を欲しがっている相手　　魔女なのだが、

その姿が浮かんでいるのだろう。

雫が言うのだから、どこまで本当かはわからないが、この男は、魔女に惚れて、その彼女を振り向かせようと、熱心に贈り物やらなにやらを渡しているらしいのである。雫の扱った石も、どこで聞きつけたのか自分の惚れた魔女が欲しがっていることを知って、わざわざ隣国から買いに来ているのだ。

雫のように主を持たない魔女は自由気ままに生きているが、男の思い人は、生まれた時から仕えている主がいて、他国にはほとんど出られない。だから、代わりに俺が、ということらしいが、その熱心さと根性には、頭が下がる。

もつとも、雫に言わせれば、魔女は変わり者が多いし、恋愛に關しても淡泊なので、そのくらいしても振られることがほとんどらしい。

それでも諦めない男に、雫は、どこまであの根性が続くのかが気になるらしく、密かに男の来店を楽しみにしているようだった。

案の定、多紀と男が話している声が聞こえていたのだろう。

「相変わらず、骨抜きだねえ」

店と住居を隔てる扉が開き、中から中年の女が出てきた。

いつもとは違い、少しだけちゃんとした格好　　といっても、

一歩間違えれば寝間着と間違えられそうな着方ではあるが、雫にしては上出来な姿をしている。

髪もちゃんと梳かした状態だ。

「魔女なんか惚れて骨抜きにされちまうなんて、どうかしているよ」

いつもと同じように、皮肉なんだか、面白がっているのかわからない言葉を、男に投げかけた。

しかし、男の方は、気にしていない。反対に、骨抜きなのは確かだなどと、呑気に言っている。

「まったく、嫌味も通じないとはね。ところで、いい返事はもらえそうかい？」

「どうか。でも、笑ってくれるようになった」

彼の思い人の魔女は、無愛想で、あまり笑わないという。今日の前にいる魔女とは大違いだ。

「それに、名前を呼んでくれるようになったし」

きちんとしていればそれなりに整った顔をしているのに、『でれでれ』という言葉がぴったりの表情を浮かべているため、全部台無しだ。

雫はそれを見て、笑いをかみ殺している。

「おまけに、次の休みに日に、部屋に招かれた」

男ににやにや笑いは止まらない。さつきよりもひどくなっている。「惚気はそこまで。耳がおかしくなるよ」

棚においてあった煙草に手を伸ばすと、雫はわざとらしく溜息をつく。

雫の気持ちは、多紀もわかる。

来る度、惚気話はどんどんふくれあがっていくのだ。

それでも多岐が黙って聞いているのは、男が本当に嬉しそうだからなのかもしれないし、こんなに愛されている魔女というのに興味があるせいかもしれない。

多紀が唯一知っている魔女は雫だけだから、様子もまるで違う魔女がいるのだと思うだけで不思議な気分になるのだ。

世の中の魔女には変わり者も多いと言うが、男から聞く件の魔女は、変わってはいるが、雫とは違うおもしろさを持っているような気がしている。

「また、来る」

そう言っただけで、嬉しそうに帰っていった人が、再び訪れることはなかった。

魔女の手をとって、二人で逃げたと聞いたのは、季節を越えた頃だろうか。

「どうしようもないね」

そう言っただけで雫は笑っていたが、念願かなって魔女を手に入れた男に対して、悪い感情は持っていないのだろう。

そうでなければ、彼女が、言われる前に石を探しに森をうろついたり、客の相手をするために、店へ顔を出すことはない。

「幸せになれるといいですね」

多紀が言っただけで、雫はなれるさと自信たっぷりな返事をする。

「なにしろ、根性で魔女を口説き落とす男だよ」

「いいなあ、私にもそういういい男が現れないでしょうか」

「むりむり。こんな森の奥で、魔女と暮らしている限り、いい男なんて現れたりしないよ」

「ですよ」

やってくるのは、得体の知れない相手ばかりだ。

その中の、たまにいる『男』は、すでに相手がいるか、何か裏がある者ばかりなのである。

あまり、恋愛方面でお近づきにはなりたくはない。

かといって、多紀の幼馴染みの男達はほとんど結婚してしまっているし、年の近い知り合いの男性もいない。このままでは出会いがないまま行き遅れ人生まっしぐらなのは間違いなかった。

だから、あんなふうには純粋に思いをぶつけられた魔女のことは、少しだけ羨ましくもある。

「ほとぼりが覚めた頃、二人で店を覗くと言っていたよ。あの魔女は、この森に興味があるようだからね。自分の手で石を採ってみていんだとさ」

「本当ですか？ 私、楽しみにしてます」

男がベタ惚れだという魔女に会ってみないと、多紀は思っていたから、その約束は嬉しい。

雫が吐き出した紫煙が、静かに立ち上っていく。

少し籠もった空気を入れ換えようと、多紀は窓を開けた。

窓から見えるわずかな空を、雲が厚く覆っているのが見える。

また、雨がしばらく続くのかもしれない。

もし、二人がやってくるとしたら、やはり雨の日なのだろうか。

いつか叶えられるかもしれない約束を思いながら、多紀は今にも降り出しそうな空を見上げた。

## 2.いと

『糸車を無くしてしまったのです』

その客は、細く長い指先でゆっくりと髪をかき上げながら、そう言った。

あらわになった首も細い。  
きつと、服に隠れて見えないところも、細いのだろう。

「それは、つまり、糸車を探してほしいということでしょうか？」

一応ここは魔女の店だ。

物は売るが、探し物をするのではない。だいたい、そんな面倒なことを、主である雫がするはずもない。

『いえ、どこで無くしてしまったのかは、わかっていません』  
悲しげに俯いた客の目から、ほろりと涙がこぼれた。

綺麗な透明の水滴は、頬を滑り落ち、客の白い服に染みを作る。

その染みは、やがて青黒く変色し、服に穴を開けた。

ああ、やはり、と多紀は思う。

入ってきた時から、おかしいなと思っていたが、目の前で泣いているのは、人ではない。

魔女の店に魔物の類が来るのはめずらしいが、ないわけではないので、驚かないが。

『申し訳ありません。糸車を無くして以来、力の制御が上手くできないのです』

自身が流した涙が服を駄目にしたことに、気が付いたのだろう。

客はそつと涙を拭くと、深々と頭を下げた。

『魔女ならば、わたくしを人のように見せる薬を作れないかと思いまして』

「人のように見せる薬、ですか」

繰り返しながら、果たしてそういう薬を作ることば可能なのだら

うかと考える。ここに住み込んで数年。魔女である雫から、そんな薬の話聞いたことはなかった。

だが、ないとは言えない。彼女が知らないだけで、存在するのかもしれないのだから。

どちらにしても、雫に聞くことが先だろう。

「店主に確認してまいります。少し待っていただけますか？」

そう言つと、はいと答えて客はゆっくりと頭を下げた。

起きてくださいと寝台の中の店主を揺さぶると、布団の中からうるさいねえとくぐもつた声が聞こえた。

「ちゃんと起きてるよ。あんまり気持ち悪い空気がただよっていたから、出ていくのが嫌だったのさ」

面倒そうに起き上がり、傍らにある煙草に手を伸ばしたのを見て、多紀が目吊り上げる。

「寝台の上での煙草は禁止って、何度も言っているじゃないですか」強引に煙草を取り上げられ、雫が不服そうな顔をした。

「私の家なのに……」

そうぶつぶつ言いながらも、雫は寝台から下りる。そのままの格好で出て行くこうとするのを見て、多紀が慌てて服を引っ張った。

「着替えくらいしてください」

「はいはいはい」

「返事は1回でー!」

多紀が手伝つて、というよりも、多紀にされるがままに服を着て髪を整えられ、準備が終わった時には、雫は『ああ面倒』をすでに5回も口にしていた。

「あれだけ瘴気をまき散らしているんだからねえ。絶対面倒事だっ  
て思ったんだよ。ぐずぐずしないで、逃げちまえはよかった。……

ところで、多紀、あんたちちゃんと瘴気除けのお守りを持っているだ  
ろうね」

「当然です。この若さで私、まだ死にたくないです」

魔女ならともかく、何の力もない多紀が、魔物相手に真正面から向き合って話が出来るわけがない。

しかも、相手は、まったく力を制御できず魔物の特徴でもある瘡気が漏れまくりな状態なのだ。

「よし。ならば、会いに行こうじゃないか」

面倒だといいながら、どこか面白そうにも見える雫の後ろをついて歩きながら、多紀は急いで先ほど魔物が言ったことを伝えた。

「詳しい理由を聞こうじゃないか」

雫がそう言っていると、椅子に座っていた魔物は、おずおずと顔を上げた。

「どうして、人間に見せかけたいなんて思ったんだい？ 糸車を無くしたと言っていたけれど、それが関係あること？」

『無くした糸車を拾ったのが、魔法使いだからです。そして、彼はそれ持ち帰り、自分のものにしてしまいました』

「それは災難だったね。魔物の持ち物は、使いようによっては、魔法使いの益になるからね。欲しがる奴はいくらでもいる」

魔女と呼ばれる人間は、生まれた時から持っている魔力の量は決まっているが、魔法使いの力は生まれつきのものではない。才能ももちろん必要だが、膨大な知識と努力があって初めて使える力なのだ。

だが、中には真つ当な方法ではなく、簡単な方法で力を手にしようとするものもいる。

例えば、魔物の持ち物や、体の一部は、それ自体に魔力を有していることが多いので、足りない力を補うことも可能だ。故に、わざわざ魔物を狩ろうとする魔法使いもいる。

もちろん、その行為は誉められたことではないし、場合によっては魔力に飲まれ、自らを破滅させることにもなる。正式な魔法使い

たちの間では、表向きはよくないこととされているくらいだ。

『わたくしは、魔物としては中級程度の力しか持っていないのです。両親から受け継いだ糸車が無ければ瘴気をつまぐ押さえることもできない。最初は自力で取り返そうとしましたが、屋敷の外には魔物を退ける結界があるため入れないし、魔法使いが外に出たときを狙っても、気配でわかるのか、いつも逃げられてしまっ』

「だから、魔物の気配をうまく消して、魔法使いに近づきたいと？」  
『はい』

「しかし、うまく人間に化けたとして、そううまくいくと思っっているのかい？」

『人をたぶらかす方法なら、幾つも知っております故』

それまでおどおどしていたはずの魔物は、唇を釣りあげて笑った。深い藍色の瞳が露わになり、怪しげな光を放ったのを見て、思わず多紀は手首の腕輪に視線を落とした。この腕輪は、雫特製の瘴気や魔力から身を守る守護がかけられたものだ。雫の腕は信じているが、相手の力が強ければ、完全に防ぎきることができない場合もある。

目の前の魔物は、自ら力は中級程度と言っているが、やはり彼らの目からは、魔女や魔法使いと違う得体の知れない力を感じてしまっうのだ。

よく魔物と出会って魅了されたという話を聞くが、そのどれもが相手の魔力が強いわけではないということも多紀は知っている。

それほど、魔物が人を魅了する力は特殊なのだ。

「あんまりうちの店員を脅かさないでくれよ」  
身を強張らせていた多紀に気が付いた雫が、やんわりとそう口にする。

『ああ、申し訳ありません。うつかりしてしまいました』

その言葉とともに、魔物の目が自分から逸らされた気配がしたので、多紀は恐る恐る顔をあげる。

そこには再び目を伏せて悲しそうにうなだれる魔物の姿があった。

「その依頼、引き受けてもいい。そうだね、報酬は、あんたが取り戻した糸車で紡いだ糸　　っていうのは、どうだい？」

『そんなものでよろしいのですか』

「あんたにとつては、そんなものでも、魔女にとつては、ありがたいものなのさ」

雫は嬉しそうだが、多紀には魔物が紡ぐ糸がどれほどの価値があるのかはわからない。雫が扱うものの殆どがよくわからないものばかりだが、糸というくらいだからそれをつかって布を作る程度のことしか思いつかないのだ。もちろん、それは糸が多紀が思う『糸』と同じという前提があつてのことなのだ。

「三日後においで」

その時までには、望むものを作つておいてあげるよと言う雫に、魔物はまた深々と頭を下げた。

「さあ、多紀。あんたの髪をよこしな」

魔物が出て行った後、雫が発した言葉に多紀は首を傾げる。

妙な行動や発言が多いとはいへ、意味のないことはしない雫だ。

その彼女が言うのだから、魔物の欲しがる薬に、何か関係があるのだろう。

そう思うのだが、目の前で嬉しそうに笑い右手を差し出す雫に、うさん臭さを感じるのは、気のせいではないはずだ。

「魔力の欠片もない人間の髪を使って、ちよつとした薬を作ろうかと思つてね」

後ずさつた多紀に、彼女の不安を察したのだろう。一応手だけは引つ込めて、説明をする。

「違う薬の応用なんだけどね、試してみたい方法があつて」

雫が言うように、多紀には魔力はない。多紀だけではなく、この地に住む殆どの人間には、そんな力は存在しない。

数少ない魔女は別として、何百人に一人くらいしかいない魔法使

いでも、最初持っている魔力は小さいのだ。

「私じゃないと、駄目なんですか」

「いや。誰でもいいんだけどね。村にいつて髪をくれって言ったなら、ただの変質者じゃないか」

すでに村での評価は変人だということは知っているはずだが、そのあたりはいいらしい。

「それに、どのくらいの量が必要かわからないんだ。いちいち貰いにいくのは面倒だろう」

まさか髪の毛全部をむしりとる気なのかと、ため息をつきたくなる。さすがにそこまではしないと信じたいが。

「使うのなら、給料に上乘せしてください。それなら、いいです。でも、それって後から何か害が出たりしないですよ」

多紀にとって、魔物はわからない存在だ。生態や種族など、雫の元で働くようになって昔よりは詳しくなったが、彼らの考え方や行動は、理解できない。

そんな彼らに自分の髪が入った薬を使われるのは怖い。

「大丈夫。一応制限はつけるし、無理やり作る薬だ。持続性もないはず」

「ほんとですか。雫さんの大丈夫は結構あてにならないですよ」  
思えばそれで、何度かひどい目にあった。

「よくわかってるじゃないか。さすが付き合いが長いだけあるね」  
「ふんぞりかえって、言わないでください」

確かに付き合いは長い。

森が一番近い村で育った多紀にとって、ここは遊び場でもあった。幼馴染みたちと一緒に、探検しつくした森なのだ。魔女にいたずらしたこと、魔女からお菓子をごちそうになったこともある。

気まぐれで、面倒臭がり、寝てばかりいるけれど、嫌いにならないのは、文句をいいつつも相手をしてくれた思い出があるからかもしれない。

「ほんとに何かあったら、責任とってもらいますからね」

多紀がそう言うと、その時は一生面倒くらい見るよと冗談めかして笑われた。

「それに、実際作れるかどうかもわからない代物さ」

そう肩をすくめてみせる雫は、おもちゃを与えられた子供のようにも見えた。

結局のところ、彼女は薬を作ることが楽しいのだ。

失敗すれば、悪かったと客に謝るだろうし、成功すれば未練のひとも残さずに、それを客に渡すだろう。

自分の評判がどうであろうとも、気にしない人なのだ。

それが、魔女というものなのか、それとも雫がそういう性格なのか。

多紀にはわからないが、変人だと言われながらも、村の人たちに受け入れられているのは、そのせいなのかかもしれない。

『約束通り、やってまいりました。薬はできていますでしょうか』

訪れた魔物は、多紀の姿を見るなりそう言った。

三日前よりも、さらになにもかもが薄く細くなっている気がする。そのまま消えてしまってもあった。

「薬の効用は一時的なもの。せいぜい1日程度だ。今のあなたの体力と魔力では、失敗するかもしれない。それでもいいなら、持っていくな」

雫の言葉に、魔物は卓上に置かれた薄墨色の丸薬をじつと見つめていた。

やがて、細く白い指先がそれに触れ、転がし、確かめるように手に取ったあと、ゆっくりと頷いた。

「いただきます」

その藍色の目に強い決意を宿し、魔物はそう告げた。

うまく行ったかどうかは、いつのまにか届いた大量の糸が教えてくれた。

引っ張っても切れない透明で細い糸は、何かを連想させるものだったが、多紀は気にしないことにした。

その糸を雫が何に使ったかは、また別の話である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0728z/>

---

魔女の小さな森

2011年12月3日19時47分発行